



渡来染織資料の調査

所員 神奈川大学 経営学部准教授 阿部 克彦

1.はじめに

共同研究「アジア圏における文化の生成・受容・変容」において、近世の渡来染織品の国内所蔵品調査を実施してきたが、本報告ではその中でも、2020年3月のMIHO MUSEUM(滋賀県)における館蔵品調査、2020年10月の徳川美術館(愛知県)秋季特別展「殿さまが好んだヨーロッパ―異国へのまなざし―」の展示品調査、そして2021年度の2回にわたる奈良の個人蔵の古裂、染織品コレクションの調査を中心にその内容を紹介する。

本研究における調査は、近世日本に渡来した、主にアジア諸地域で製作された染織品を対象とし、なかでも、中東・西アジアからインドの各地で製作された絹や綿などの織物が、インド洋海域の交易ネットワーク上で流通し、室町から江戸期にかけて日本に渡来し、その後収集、鑑賞されてきた様相を検討するものである。

2.裂帖と名物裂

裂帖きれちゆう(裂帳、もしくは裂手鑑きれてかがみとも呼ばれる)とは、主に室町時代以降に渡来した名物裂をはじめとする染織品の断片を台紙に貼った冊子・アルバムを指し、17世紀以降江戸時代を通して主に茶人や茶の湯に関わる人々のなかで製作された。もとは茶道具を包む袋物や掛け軸の表装の製作時に出た端切れを破棄することなく保存する方法であったが、やがて古くは奈良時代から江戸時代までに日本に渡来した中国をはじめとするアジア各地の布や各種染織品のサンプルを網羅した資料集、見本帳として鑑賞の対象となった。特に、モウルまたはモール(当て字で毛織、蒙琉などとも表記される)と称されるイランやインド産の絹織物は、金糸や銀糸を用いた異国趣味溢れる意匠を持つことから徳川家をはじめとする大名家や公家の間で愛好され、断片は大切に裂帖に残された。名物裂とは、江戸中期頃から用いられた呼称であり、そのほとんどは中国産の金欄や緞子などの絹織物で占められるが、上記のモウルの名称も早くは江戸初期に製作された裂帖にその記述が現れている。

3.MIHO MUSEUMの裂帖と

イラン(ペルシア)染織コレクション

滋賀県のMIHO MUSEUM(ミホ・ミュージアム)は、中東やエジプト、中央アジアから中国までの古代から近世に至るオリエントの美術を多く所蔵することで知られるが、そのコレクションは、茶道具や茶室を飾る絵画や調度品など、日本の茶の湯に関わる美術品の収集を原点とし、茶道具の袋物をはじめとする染織品も数多く所蔵する。MIHO MUSEUMの裂帖は、主に大名家や豪商が用いた茶道具の仕覆や表具などに用いられた織物の断片を保存し、その種類や意匠の見本帳として、江戸初期以降製作されたものである。2018年以降、毛利家2帖、近衛家2帖、伊達家1帖、土田家1帖を順次調査し、主にその中に含まれるモウル裂について、その織組織や素材、特徴などを記録し、館所蔵の高精度マイクロスコープを用いて拡大画像を撮影した。近衛家裂帖のなかのモウル裂を200倍に拡大した画像では、銀の針金を叩いて延ばした薄板状の銀線が、切金を白色の絹の芯糸に巻いた撚銀糸が見える。現代では、このような銀(もしくは鍍金)の撚糸を用いた布をモウル裂と総称する場合が多い。

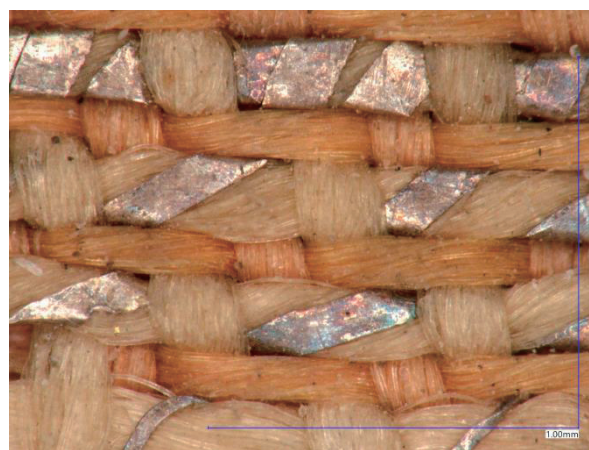


図1 モウル裂、マイクロスコープ画像、拡大倍率200倍、近衛家伝世裂帖、MIHO MUSEUM

16世紀後半に、イランの都市カーシャーンで製作されたと考えられる絹製の綴織つづれおり(タペストリー)2枚は、同館が収集する中東(エジプトを含む)から東アジアに至るユーラシア地域の古代から近世までの美術・工

芸品の一部を構成している。この2枚の絹綴織は、同館に収蔵されて以来、修復が続けられている。現在は展示に向けて修復作業中であり、今回の調査期間中においても修復時の様子を観察することが許可された。特に修復終了後は保護のために裏打ちされ、展示後は観察不可能となる裏面を確認できたことは貴重な機会となった。また、館内には、イラン(ペルシア)で製作された絨毯の中でも世界的に名高い、16世紀後半作のメダリオン動物文絨毯が展示されているが、これは平常展示されているため常時観覧可能である。この絨毯は、17世紀初頭からヨーロッパの貴族サングスコ家が所有していたが、長年ニューヨークのメトロポリタン美術館によって保管、展示されたのち、1995年にMIHO MUSEUMの所蔵となっている。

4. 徳川美術館の染織品コレクション

尾張徳川家に伝来する品々を多く所蔵する徳川美術館では、その豊富な染織品のコレクションが知られている。本特別展では、中国、東南アジア、イラン、インド、またはオランダなどヨーロッパから近世に渡来した数々の染織品が幅広く展示された。名物裂として知られる金欄や錦などの絹織物、綿布に染色を施したサラサ(更紗)、ウールを用いた絨毯、そして江戸時代を通じてスペインやオランダからもたらされた金唐革などの多様な所蔵品が展示された。

また同館学芸員によれば、これらの膨大な染織の所蔵に関わる記録である蔵帳も多数存在することから、現存する所蔵品との照合などにおいて今後の研究が期待されるとのことである。

5. 奈良の個人コレクション

江戸時代を通じて制作された裂帖の多くは国内の博物館・美術館に所蔵されているが、個人蔵となっているものも数多く存在する。2019年から(一部は2018年から)は、奈良の個人コレクションを中心に調査を継続している。今回の調査では、伊達家に伝わったとされる大判の裂帖を含む、数種の裂帖や茶道具の仕覆などの調査を許された(図2、3参照)。これは、国内外の古裂を収集するギャラリーのオーナーの個人蔵のコレクションであり、博物館・美術館の学芸員をはじめ、染織品研究者にもその門戸が開かれており、

日本における染織品研究の重要な拠点の一つであるといえよう。



図2 仕覆 個人蔵、奈良県



図3 裂帖 個人蔵、奈良県

6. さいごに

今回の研究班における調査は、2018年から継続して実施している渡来裂の国内研究調査の一環であるが、染織品という資料の性質上、生地柔らかさや重さなどの確認に加え、織組織の同定を行うにあたっては、作品そのものに接近、ないしは接触が必要な場合もあり、調査には所蔵品の管理者側の理解に負う側面が多岐である。また、染織資料の繊維や染料などは、空気や光による劣化も避けられないため、調査方法や時間の制約も受ける場合があり、接写用マクロレンズやマイクロスコープ等を使用した倍率の高い拡大撮影にあたっては、撮影機器の固定や照度の調整などで困難を伴う場合も多い。最後に紹介した個人コレクションの調査では、所有者より資料に直接接触することが許されることで、より詳細なデータの取得と記録作成が可能となっていることは特筆すべきであろう。